

20周年記念誌

ISSN 0910-2396

# 野鳥友刊

—北海道—

第 80 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成2年7月21日



カワセミ 1990. 4 撮影者 千葉 広

80号を記念して.....	柳沢 信雄.....	3
北海道野鳥愛護会20周年に寄せて.....	百武 充.....	4
いままでとこれからの20年.....	野村 悟郎.....	5
提言・意見・随想		



## も く じ

野鳥との付き合いと責任（森拓人）・小樽海岸の野鳥（中野高明）・この場をお借りして（道川富美子）・20周年記念誌によせて（高梨敏子）・今は昔.....（溝部泰子）		
・英国の鳥、小事情（犬飼弘）・愛護会20周年に寄せて（野坂英三）・20周年に托して（宗澤美佐子）.....		9
愛護会のあゆみ.....		10
北海道野鳥だより総目録.....		13
北海道に舞い降りた迷鳥たち(5).....	山田 良造.....	18
自然保護係は忙しいが...楽しい(2).....	隅田 重義.....	20

### 井上元則先生 御逝去

当会第2代会長の井上元則先生は、かねて入院加療中のところ、平成2年5月26日午前6時30分、90才をもって永眠なさいました。

先生は道職員定年退職後も江別市議会議員、北海道栄養短期大学教授、全国社会教育委員連絡協議会副会長等多方面にわたり幅広く貢献され、その功績は民間・市・道・国からの、かぞえきれない程の受賞となっております。

私ども野鳥に関心を持つ者にとりましては、ミユビゲラの先生、ノドアカツグミの先生として、野鳥愛護活動のリーダーとして常に心の支えでありました。

いつかはと覚悟していたことではありますが、それでも先生のご逝去は、あまりにも大きな衝撃であります。

会員の皆様にお知らせし、会員の皆様と共に心からなる哀悼の意を表します。

会 長 柳 沢 信 雄

# 80号を記念して

## 会長 柳 沢 信 雄

平素、会の運営にあたり皆様方より種々御協力をいただき誠にありがとうございます。

おかげさまで「野鳥だより」も80号を発行するまでにいたりしました。

会が発足したのは、昭和45年5月で、発足以来20年を経過し、21年目に入ったこととなります。

10年をひと区切りとすると、ふたつの節目を越えたことになり、本年は三つめの節に向けて新たな出発をする年でもあります。

### ○最初の節まで

ひとつの節目までの10年間は設立の準備から発足も含めて、北海道の力強い指導と援助を受け、会の主活動である探鳥会、会報、野鳥写真展、会員懇親会等を次々と取り入れ、しっかりと定着充実させた期間であったと思います。

言わば官主導型で発展、充実、定着した期間だったと言えます。しかし、会員の誰からも官製的な匂いに対する不満は聞くことがありませんでした。

それは当時、道内に野鳥関係の団体は無にひとしい状態で、多くの人々が野鳥に親しむ機会を待ち望んでいたことと、会の設立に奔走された当時の道の猟政係長安田鎮雄氏を中心とした道職員の公私共々、時間や労力の限度を超えて献身くださる姿に感動し、このひたむきな道職員の力を借りながら、自分達の手で会の健全な運営ができるようにと積極的に指導、助言を願っていたからだと思えます。

官民一体の懸命な創設期であったと言えると思えます。

### ○ふたつめの節

ふたつ目の節を迎える10年間は、官主導から会が独り立ちし、よちよち歩きから、ようやく自分達の足でしっかりと歩きはじめた期間であったと言えます。

ちょうどこの頃、道は多くなった助成団体の整理を考えていたようですが、たまたま日本野鳥の会の活動が全国的に盛りあがりを見せ、北海道の各支部へのテコ入れと新たな支部の設立により一層の会員獲得を旨とした活発な動きがあった。

道は渡りに船と、日本野鳥の会幹部と北海道野鳥愛護会役員、それに道の三者による話し合いを重ね、北海道野鳥愛護会の発展的解消という形で会員をそのままそく

り日本野鳥の会へ引き渡す案が浮かびあがった。

公務多忙を理由に道職員の幹事総辞退と助成金の打ち切りをちらつかせて、日本野鳥の会への組織ごと加入をうながしてきた。

しかし、上層部の思惑とは別に、精力的な活動を続ける道職員を含めた幹事達の多くは、会の存続を強く望み、ねばり強い抵抗にでた。

助成が打ち切られても、会員が半減しても北海道で誕生し、自分達で育てた会を消すわけにはいかない。

幹事たちのこの強い思いが、会の役員を心を動かし、やがて道側も説得をあきらめる方向となった。

この間、前田一步園財団からの表彰金をもとに絵葉書「北海道の珍しい鳥たち」制作、会員無料配布、又、活動幹事の中心的存在であった萩千賀さん、北尾論さんが他界され、うちしずむ幹事達に、故人の意志を生かし会発展の為に頑張ってほしいとの言葉と共に届けられた御両家からの寄金は、残された幹事達への大きなはげみとなり活動継続のきっかけとなった。

故人や御両家のお気持ちにこたえるために、会として今何をすべきなのか、我々が今出来る事は何なのか、幹事会の話し合いが「私たちの探鳥会—探鳥会17年の記録—」制作、会員への無料配布となった。

これら諸々が会の活動に安定性をつくりだしてくれたように思う。

官主導から脱皮し波乱を超えてようやく軌道に乗れた節であったと言えよう。

しかし、忘れてならないことは、発足以来この会に関わりを持たれた多くの道職員の方々の、会への変わりぬ厚い思い入れと助言、助力が継続の太い支柱であり、深く大きな底流となってきたことです。

### ○次なる節に向けて

20年1日、会員数も活動内容にも全く変化の見られない会のどこに発展性があり、会存続の意義があるのかと、ちまたから嘲笑う声も聞えてくる。

たしかに我が会は、よそ目には目立った大きな変化がなくここまでできていると思う。

だからといって、発展性や継続の意義がないときめつけることには反論したい。

一人でも多くの道民に野鳥への関心を持っていただきたい。その為には会費を極力安くし、入会しやすく継続会員となってもらおう。

従って会の活動は会員有志や幹事のボランティアに徹する…これで20年間続いた。このことだけを見ても素晴らしい会だと胸をはれると思っている。

この進み方は伝統として、これからも続けられることでしょ。

しかし、それだけで良いと思っている訳ではありません。社会の大きな流れに沿って、その時々々に会が求められているものは何かを話し合い、活動の方向づけを持って進みたいものです。

当面の問題としては、発足以来の会の探鳥地が次々と大きく破壊され、探鳥地での野鳥が激減していることへの取り組みがあげられます。

鶴川から干潟が消える。福移の堤防から柳が無くなった。東米里は残土と資材置き場で草原がこま切れになった等々…。ここ1～2年の間に会の探鳥地であり、野鳥の宝庫で鳥たちの好ましい生活の場が急速に消滅するのを傍観するだけ、そこが駄目なら次を探せばよいのでは済まないように思います。

長い間会としてつきあってもらった野鳥たちの生活の場について、鳥たちの気持になって考え、もの言えぬ鳥たちの代弁者として発言する責務を感じます。

これからの開発には、新しい発想を。野鳥と共存できる環境こそ人々にとっても住み良い環境であること、を発言していきたいと考えています。

## 北海道野鳥愛護会20周年に寄せて

百 武 充

北海道野鳥愛護会が設立された昭和45年当時のことは、本誌50号記念号で何人かの方が振り返っておられます。私もそのとき拙文を寄せていますが、今回それと重複する部分があるかと思いつつ、また書かせていただくことにしました。

20年前の日本野鳥の会の会員は、全国でわずか2、3千人程度でしたから、鳥を見て楽しむ人はおそらく今の10%くらいしかいなかったのでしょう。道内に野鳥の会の支部は4つありましたが、多くは開店休業の状態、活発な活動をしているものはありませんでした。しかし、経済の高度成長に伴う公害の激化が大きな問題になり、尾瀬や大雪山で、亜高山帯への観光道路の建設による自然破壊が批判を浴びるなど、環境問題への取り組みが活発になった時代でもありました。また、農村人口の減少と都市人口の増大などによって、自然が身のまわりから遠くなって行くことから、自然を求める傾向も、次第に強まってきていました。

北海道庁が、従来狩猟側に片寄っていた狩猟行政と保護行政のバランスを保つために、野鳥愛護団体の設立を画策したのも、このような社会の動きと無関係ではありませんでした。しかし、過去にもあった愛護団体設立の試みを踏まえつつ、その実現にこぎつけ、また、今日の発展の基礎を築いたのは、当時鳥獣行政の担当係長だった安田鎮雄氏と、その後を継いだ野村悟郎氏の手腕に負うところがきわめて大きかったことを、改めて記しておきたいと思います。

野鳥愛護会の結成は、本州以南に比べて自然が豊かで、それゆえに自然保護運動が全体として低調だった北海道にとって、確かに新しい風の一つだったでしょう。1969年11月、有志が集まって道庁の会議室で行なった設立準

備会や、翌年5月、会の設立早々にバス2台を借り切って催された野幌森林公園での最初の探鳥会の熱気を、いまさらのように懐かしく思い出します。また、事務局を引受けていた道庁自然保護課の私どものところに、役所としては全く異例なことに、ごく普通の市民として訪ねてくださる会員の方が多くあって庁内の注目を集めたことも、つい昨日のこのように思い出されます。どちらかというと言主導でできた会とはいえ、その運営が決して「お役所的」ではなかったことの一つの証と、誇らしく思っています。

もう少し個人的なことを言わせていただくなら、私はこの会の活動を通じて非常に多くの方とお話する機会が得ました。それらの方々の多くと今も連絡があり、北海道とのつながりを感じられるのが、とてもうれしく思われます。

私は1977年に北海道を離れ、以後はただ会報を読むだけの会員に過ぎませんが、機関誌の「野鳥だより」も、号を重ねるうちに資料価値が出てきたように思われます。また、探鳥会の参加者などを見ても、お名前を存じ上げない方が多くなりました。20年の歴史を感じます。

設立当時の役員のうち、犬飼哲夫会長が昨年、井上元則副会長がつい最近亡くなられました。また、事務局で地味な裏方の仕事を黙々と勤めていた萩千賀さんの温顔も、既に二度と見ることはできません。ここにも時代の移りを感じます。

設立から20年たって、地球の温暖化、フロンガスによるオゾン層の破壊など、環境問題は全地球的規模に拡大され、反面身近な自然の意味が見直されるなど、ますます重要性を増してきています。今や世界で一番のお金持ちになった日本の責任も、それだけ大きくなってきたわ

けです。しかし、最近のリゾートブームなどを見ていると、自然を金もうけの対象としか見るのできない人の多いことは20年前と同じで、この間にいったい何が変わったのだろうと考え込んでしまうこともあります。

野鳥関係の団体にしても、本会以外にも日本野鳥の会の支部が道内に数多くでき、それぞれ活発な活動を続けています。本会の活動も、このような世の中の動きと無

縁ではあり得ません。しかし一方では、時代の流れに係わらない大きな目標を見据えることもまた、必要でしょう。役員の方々を中心に全会員が一丸となって、道民のために、さらには世界のために、環境問題に関心を持つ人を増やし、素晴らしい北海道の自然を守るための活動をしていきたいものです。

〒355-03 埼玉県比企郡小川町みどりが丘3-11-14

## いままでとこれからの20年

野村 悟郎

### 本会設立の頃

鳥獣行政の中心は長いあいだ狩猟指導によってしめられていました。これはわが国だけのことでなく鳥獣保護の先進国といわれていた欧米諸国でも、野生鳥獣を対象にした行政は狩猟規制が主なものになっていました。

しかし時代がすすみ社会が進歩するにつれて、野生鳥獣を狩猟の対象としてみるだけでなく、自然のままに生きている動物の文化・思想・産業などに及ぼす有益性を認め、保護することで人間生活にも役立たせようとする考えかたが生れ次第に力をつけてきていました。

明治時代になって、外国の文化や制度をとり入れて近代化をはかったわが国ですが、狩猟制度も外国のものを参考にして問題をふくみながらも、それなりに形を整えて100年ほどの歳月を過してきました。この間のことで考えなければならないのは、欧米諸国の狩猟制度をとり入れたわが国なのに、その後外国で力を得てきていた保護思想に気付かなかったのか、気付いていても無視してしまったのか、いずれにしてもわが国のものとしないうまま時を過してしまったことです。

保護態勢の立遅れを示してしまったわが国ですが、このままではいけないと思う空気が全国の鳥獣行政関係者の間に生れてきていました。北海道野鳥愛護会が生れた頃のこと、本会誕生にあたって行政が積極的にお手伝いしたのはこのため、本会が創立されたことで本道の鳥獣行政は大きな成果を取めたことになるのです。

### 社会のある部分では

北海道野鳥愛護会が20年の歩みを続ける間に、野生鳥獣にたいする社会の認識もずいぶん変わってきたのは当然のことですが、いま思い出してみるとよくもあんなことがと感ずる事件も20年以上前にはあって、世情の移り変りを思い知らされます。

昭和44年に野幌森林公園が鳥獣保護区になって間もなくのことでした。当時、私が席を置き鳥獣行政を担当していた道の林務部林政課猟政係に来た人があり、かなり勢い込んで話し始めました。

ずいぶん長かった話を要約しますと、その人の知人（と言って居ましたが肉親者だったように思えます。）の70歳ほどになる人が、野幌森林公園にコガラ（飼鳥関係の人はヒガラをコガラと言っているようです。）を捕りに行ったところが、森林管理者に見とがめられ説教されて追いつ返された。そのことが遺憾だと言うことになるのです。

主張の根拠は、野幌森林公園を鳥獣保護区にした目的のなかに一般庶民が鳥や獣とふれ合って楽しむことも入っているはずだ。われわれが野生鳥獣とふれ合う手段は、捕えて自分のものにし可愛がって育てることである。この楽しみにケチをつけるのは越権行為であり鳥獣保護区設定の目的をも損うことであるといったことでした。

この人に鳥獣保護区の設定目的を話して理解させ、ヒガラ（当人はコガラと言って居ました。）を捕獲する前だったので説諭処分ですんで運が良かったのだと話し、納得させて引き取ってもらうまでずいぶん時間がかかりました。昭和40年代中頃の世情の一部でこの事件があって半年ほど後に、本会が発足したのです。

### 諸先輩とのこと

北海道野鳥愛護会創立当時を思い出して特記したいことのひとつに戦前から本道の野生鳥獣に密接な関係を持ち、実績をつんでこられた先輩諸氏が会の設立に参画されていることをあげることができます。

先輩諸氏は、外国では国民的な関心事にもなっている野鳥保護運動なのに、わが国にはまだみるべきものがないと立遅れを指摘されたこと。パードウィークに、ウグイスの上手な飼いかたといった、野鳥保護に逆行する話題がマスコミによって紹介されてしまう例をあげ、保護知識の普及が遅れている現状を示されたこと。外国を旅行して、ヨーロッパの都市の池では水鳥が警戒心をなくし市民と触れ合っているのを見て驚ろいたことなどを述べられています。

これらのことで浮び上る問題点を解決するのが、本会の努力目標だったと思って現状を見直しますと、野鳥保

護によせる全国的な関心の高まりをはじめ、飼鳥を美德とする風潮が社会の表面から消えてしまっていること、道庁の池などで市民とカモとの触れ合いが日常のことになっていることなどをあげることができ、諸先輩が心にとめられていたことが着実に解決してきたと言えます。もちろん、本会だけの力でこれだけのことができた

とは言えません。しかし応分の努力はしたはずで、われわれは総りのある20年を過したことになります。問題は次の20年に移ります。どんなことがおきるかいずれにしても諸先輩に誇れるものを得る努力をしたいものです。

〒063 札幌市西区西野7条1丁目

## 野鳥との付き合いと責任

森 拓 人

昭和52年12月14日、私は3年と2か月半の北海道支社勤務を終えて札幌駅を立った。飛行機で一気という気になれなかったので、函館で一泊して最後の最後の探鳥をしようと思ったからである。コクガンやシノリガモ、クロガモなど初めての鳥に会える期待もあったはずなのに、東京に戻ることが決まってから続いていた重い気分は晴れないままだった。51年5月、愛護会の私設探鳥会に初めて参加して以来1年半の間に知り合った楽しい鳥仲間、そしてすばらしい鳥たち、北海道の豊かな自然と別れるのは自分にも不思議なくらいこたえた。生まれてから高校を終えるまで北見で育ち、内地に渡ることはずでに何度も経験済みだったのに。

翌年の春に出かけた東京郊外の高尾山探鳥会は、ひそかに案じていた通りだった。アカショウビンの鳴き声は聞こえたもののキビタキも声だけだった。そして参加者はみな、そのかすかな声に感嘆の大声をあげた。

その高尾は、今はそのころの面影さえない。アカショウビンは間もなく声がしなくなった。2、3度見たブッポウソウはここ数年全く見ない。そして去年も今年も高尾には行っていない。高尾だけではない。首都圏で夏鳥が確実に見られるところはほとんどないといってもいい状況なのだ。戻ってきた当初、ちょっとした暗い林があればいたサンコウチョウがほとんど見られない。不景気な話ばかりだが、残念ながら現実である。

ウトナイ湖・植苗の春、四季の野幌原生林、春秋の鶴川、もっと近いところでも藻岩山、円山周辺、そして私のフィールドだった豊平墓地と林業試験場跡。人と鳥と自然との出会いの場所としていつも思い出すところだ。そう、歩いて10分ほどだった林試跡では、キビタキはもちろんオオトリ、マヒワ、イスカ、クロジ、コルリ、ノゴマ、マミジロなど40種以上観察した。

しかしこの林試跡も私が帰るころには、警察署に敷地を削られ、残りは“立派な”公園になった。恐らく鳥は来ていないだろう。円山周辺もすっかり鳥の姿が減ったらしい。札幌最後の探鳥をした雪の日、沢から飛び立つアオシギを見たが、今は来ないという。道東でもエトピリカ、チシマウガラス、シマフクロウ……。

高尾山には、首都圏環状道路のトンネルが掘られる。東京湾唯一の自然の干潟である木更津沖には東京湾横断橋ができてかなりが埋め立てられそうだ。そして、リゾート・ブーム。

20周年記念誌に暗い話になってしまった。しかし、以前には普通に見られた鳥が今は見られないというのはやはり深刻なことではないだろうか。このごろ、鳥を見て楽しんでいだけでは済まない、何か責任を果たさなければならぬ時期に来ているような気がしている。

〒277 柏市西山1-9-7

## 小樽海岸の野鳥

中 野 高 明

日本海側の冬の鳥観察の一つとして小樽港の探鳥会が寒風膚をさす日の多い12月に行われています。

毎年貸切りバスをチャーターして祝津から小樽港にかけて観察地を効率よく回るよう計画していますが、熱心な方々の多いこの行事、実施してから14回目を終えました。

この探鳥会で殆ど毎年のように記録されているカモ類としてはホオジロガモ、シノリガモ、コオリガモでウミアイサ、クロガモは観察されていない年が時々あります。

カイツブリ類は3種、ウは2種、カモメ類は8種、ウミスズメ類は5種が観察されており、特にウミガラスは88年まで5回の記録があります。また、珍しい種類としてはウミバトをあげることができましょう。

単独、またはグループでゆっくり時間をかけて観察されますと種数も多く、野鳥たちの愛らしい「しぐさ」にも接していただけるものと思います。事実ハヤブサが獲物のドバトを襲う場面に遭遇されたり、上空を悠々と移動するオジロワシやオオワシに胸のときめきを覚えられ

た方もあったと思います。更に小樽では初記録の鳥種も何度かありました。

小樽市は狭いながらも海、山に囲まれ地形の変化に富んでいる関係上、鳥種にも恵まれているようです。

海岸線の崖にはオオセグロカモメ、ウミウ、ハヤブサ、イソヒヨドリ、アマツバメなどが営巣し、渡りの途中とみられる海鳥の群れにも出会うことが何度かありました。

小樽市に永い間住んでいてこんな所にこんな鳥がいた

のかと驚いたり、感激したりすることも珍しくありません。開発の波が押し寄せている今日ではありますが、まだ自然環境は残され続けているようです。

私たちに姿態、声、生活のすべてに互って感動を与え続けてくれる地球ファミリーの野鳥たちと何時までも共存できる日を夢に、皆さまと共に願い守り続けて参りたいものです。

〒047 小樽市清水町26-31

## この場をお借りして

新聞で植苗探鳥会の案内をみつけ、探鳥道具？も、ろくに持たずに出かけてから、いつのまにか丸8年。それから双眼鏡・望遠鏡はもちろんの事、ザックやら雨具やらと次々にはしくなり、終いには、探鳥には足がないと不便だと車まで買うはめになってしまいました。我家では、鳥関係の本が棚3段を占領し、置物・カレンダー・額の中まで、どこを向いても鳥さんがこっちを見えています。

私は、小さい時から人の顔を覚えるのが苦手で、たとえば色白で背が高いという2人がいたら、もう区別がつかず、残念ながら、鳥にもこの癖が出てしまいました。初めにムクドリとヒヨドリの識別（という程の事でもないのですが）に、ずいぶん<sup>てこず</sup>捩捩りました。どちらも裏庭のクルミの樹に時々やってきて、スズメより大きく、ハ



ヤマセミ 山田 良造

トより小さいという点は似ていますが、それ以外、体の色はもちろん、顔かたちも違うし、鳴き声も、止まり方も、飛び方も全く違っています。それでいてどうしてあんなに判らなかったのかと、時々思い出しては、ひとりで笑っています。

その私が、探鳥幹事の腕章をつけて「今囀<sup>さえず</sup>っているのは、〇〇〇〇という鳥です。」な～んて、恥ずかしいので小さな声ではありますが、一応教えたりしている姿は自分でも信じられない位です。これは、ただただ、愛護会と、そしてその縁で友人となってくださった方々のおかげとっております。

本当にタダで、こんなに親切に教えてくれる会もないでしょう。年会費1,500円は、野鳥だより発行分で消えてしまいます。それ以外は、互いの力の出し合いだけで成りたっている会の…驚きの20周年です。

ここ数年、バードウォッチングにあちこち出かけるようになってから、やっと気づいたのですが、カモが親子で泳いでいた沼や、踏みわけるとはばかれる程に色々な植物が繁っていた野が、いつのまにか土砂の山と化したり、開けた芝地に変っていたなんて事が少ないのです。こんな時、悲しく、泣きたくるだけで、何としたらこんな風にならないように出きるかも思い付かない自分が、情けなくなってしまうこの頃です。

〒065 札幌市東区北32条東6丁目

## 20周年記念誌によせて

現在、神奈川県在住である私にとっては、一年半の札幌での探鳥した日々の移り変わりが、この「野鳥だより」によって、あちらこちらで現在も参加しているかのように感じられることです。あそこはこうだったと私が覚えているように、鳥さんも、行った場所は決して忘れることはないのだと思います。

どうして探鳥に<sup>ず</sup>っぽり埋もれてしまっているのだら

## 高 梨 敏 子

うと思っはいても、ウワノソラで、フワフワと楽しむばかりでいます。前回の79号の藤の沢新年探鳥会の記に当たった小野さんの文より、小沢さん、高橋さんの話の中の「森や鳥たちがこんなにも大きな喜びや生きる勇気を私たちに与えてくれている……」の声に、そうだ！本当にこんなにも大きな喜びを与えてくれると、今までの問いの答えが、すんなりと受け入れられ自然に消化さ

れてしまったことは、大変な良薬であったと感じます。私はどろ亀先生の話聞いてみたいと思っていました。こういう方のお話は、私にとっては貴重な心の栄養になります。私なりに吸収して、受け継いでいきたいと思うのです。

愛護会の会員の中にも、鳥を通しての講演会やお話等をしていただけたらと思う人もいらっしゃると思います。

## 今は昔……

この春、私は「マイフィールド」でクログミの囀りを聞いた。そこは神奈川県藤沢市の新林公園。私たちの小さな探鳥クラブの願いかなって都市公園としてはまずまずの自然が保たれている。

昭和55年以来毎月一度の「川名一新林探鳥会」の参加者はこの頃は20人を超える。クログミはこの会での初記録。手帳にピカピカマークで初めての出逢いを記録した者も多かったと思う。

良い季節に一日かけて箱根にでも出掛ける機会がなければこの辺りの人達はクログミの囀りを聞くことはまずできない。

公園の雑木林の奥から陽気な節回しの朗々とした声が聞こえてきて誰かが「キビタキ？」といったとき私も一瞬自信が揺らいだ。私クログミと同じ街に住んでいたのはもう13年前のことなのだ。

昭和44年、主人の転勤で札幌に住むことになった私はその翌年に発足したばかりの愛護会に早速入れて頂くことになった。自然から受ける喜びをなにか現実逃避的と決め付けられる肩身狭いものと思ってきた私はここの

## 20周年に託して

誕生から20年経つと人間であれば成人となる。20年の歳月は平坦ではあり得ない。しかし、此処までは蓄積というか余力というか、誕生へ込めた期待を持続出来るような気がする。野鳥愛護会の歩みに当て嵌めてみると、今後こそ个性的であることと、自己形成の責任の上立つ充実期に向うということになると思う。

不勉強故に多くを語る資格のない私には具体的な事は申し上げられないが、唯一、自然を取り戻そう！という願望を土台とした運動を、野鳥だよりを通し、広く外部発信出来ないものだろうか、との思いがある。

雨空の中でもカッコウの声はさわやかだ。若葉のみどり、滴るばかりの6月は、その自然の中に呼吸するよろこびを殊更に意識させられ、自然の恩恵に対して敬虔な気持になる。

自然の中であることなら、鳥・昆虫・魚・花・木・土壌・動物等何でもいいのです。是非、紙面での資料ではなく、忘れてしまうにはもったいない事など、会員の方々に、そんな機会を設けて下さることを希望したいと思います。

〒247 横浜市栄区笠間町302-2

パーク・ノヴァ大船301

## 溝部 泰子

びのびと大きく息をした。

壮年の立派な方たちが忙しい仕事の合間に会の世話をし自身もおおらかに皆と楽しんでおられたからだ。鳥見に連れて行って頂く北方の樹林や原野や湿地はまったく未知の世界だった。自然の素晴らしさも人の親切も無限に湧きでてくるもののように甘えてうけるばかりの楽しい月日を8年間、札幌を去るまで続けた。

年月たち、近年「野鳥だより」を拝見すると運営の労を取られる方も探鳥会参加者も存じあげない方が大半になった。人口130万を超したと聞く市内にクログミやカッコウはまだ住んでいるだろうか。

変わってゆくものはあるにしても私の遙かな思いの中には、今もその昔の私と同じように鮮緑のミズナラの林に風渡る原野に野鳥の姿を求めるときいつの間にか心のかよう友を得ている幸せな人達、自然の恵みを掛けがえないものとする意志が明らかに育ってゆく人達がありありと描かれる。

〒251 藤沢市片瀬山3-21-19

## 宗澤 美佐子

ふと、野鳥の生命と自然について考える。野鳥たちの命数はどれ程なのだろうか。顕著に進む自然の喪失現象に対して、どれ程の適応能力を持っているのだろうか。限度をわきまえず山を崩し、緑を滅亡させて行く人間の所業は、自らの首を締め上げるだけでなく、巻き添えに依って他の生物を存続の危機に陥れていく訳だが、それ故に、この大地との共存が叶わなくなるとき人間が減るのは止むを得ないし、自然の成行きとも思うけれど、手を拱いて、その愚かさを嘆くことしか許されない程に事態の終焉が迫っているのだろうか。

そうは思いたくない。人間は人間のために、その英知を結集して自然破壊に歯止めをかけなければならないし、他の生物に対しては、そうしなければ申し訳の立たない義務があるだろう。



野鳥愛護会の究極の目的が、自然保護の一翼を担うことであることを信じている私である。誰も望まぬ筈のないこの願いが結集されて、世界中に怒濤のような抑止力が働き、現状維持から徐々に、自然復活への道を歩むことが出来るとしたら、そんな素晴らしいことはない。

そんな夢を抱きたい。そうして、その兆しを見つけたら私は、その先を信じて、人間讃歌をしみじみと奏でよう。20周年、おめでとうございます。

〒044 倶知安町字山田ささき坂

## 英国の鳥、小事情

## 犬 飼 弘

昨年7月23日から8月20日まで学生達とイングランド・ウェルズ・スコットランドを中心の文学探訪の旅をしました。真夏しかもかつてない程の猛暑、ささやかな鳥との出会いをとりとめなく述べてみましょう。

ストラットフォード・アポン・エイボンではエボン川の白鳥と呼ばれたシェークスピアの“真夏の夢”をマチネ観劇しました。白鳥といえばヴェニスの人の中のパッサーニオの「箱選び」の場面のポーシャの云う a swan-like end, の白鳥は絶唱を残して死ぬ Whistling Swan を云うのでしょう。

数年前からテープで英国の名鳥 Nightingale (サヨナキドリ)、Blackbird (クロウタドリ)そして Robin (ヨーロッパコマドリ)の歌声を何度も楽しんで聞いていました。そのうちのクロウタドリのみ観察できました。一個所はロンドン南西 120 Km にあるソールズベリ平原にある先史巨石時代のストーンヘンジの付近の草原で一群にあり、そして6日後イングランド北西の湖水地方にあるウィンダーミアで一羽。ロビンは英国鳥としてサヨナキドリは英詩・文学では最高位にありクロウタドリは人気では第1位といわれる程どこでもみられる鳥のようです。ただその明るく甘い歌の持主にかかわらず black ゆえに少々損をしているようです。

オスは全身まっ黒で、わずか嘴と目のまわりだけが黄色です。その歌声はクロツグミに似ていると云われていますが、そのキヨロンはクロツグミよりゆったりとしているようです。おさめのツツ音はクロツグミと同じようです。

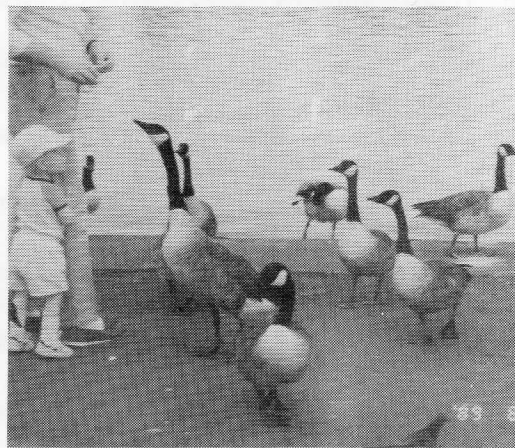
さてロンドンではロンドン塔で飼われている6羽の Raven (ワタリガラス)です。かつてはロンドンの掃除屋で害虫をとるといので保護されたのが塔で飼われるようになったらしく「ロンドン塔にカラスがいなくなると大英帝国は崩壊するだろう」といわれて久しいが帝国が縊り死した今も羽を切られ飛び立てない状態で放されているのは皮肉です。そのうち一羽が大きな口をあげてアングロ・サクソン語で hraefn と挨拶してくれました。

最後に行程中二度目のロンドン入りの際ハイド・パークのサーペンタイン池で見かけた Canada Goose の一隊です。頬の白さ故にシジュウカラガンの和名がつけられています。以上バードウォッチャーの関心をもっとも鈍る季節の英国における鳥のはざかい期の寸見でした。換羽完了まで彼等もふかい茂みにひそんでいたのでしょう。

〒062 札幌市豊平区中の島2条5丁目10-7



ロンドン塔の Raven



サーペンタイン池で

# 愛護会20周年に寄せて

野 坂 英 三

愛護会20周年おめでとうございます。

毎回の探鳥会の幹事さん達や「野鳥だより」の編集の方々の御苦労に対し、いつも感謝しております。

探鳥会に行くと、鳴き声だけで鳥の名前を、言い当てる人が居ますが、20周年と聞いて、なるほどと納得致しました。私などは、ヒヨドリさえ、ちょっと変わった鳴き方をすると、もう分かりません。まだ経験が足りなく早く先輩達に追い付きたいと思っております。

鳥の不思議な事、例えばカッコウは、どうして托卵するのかとか、普通の鳥は雄と雌で色が違うが、同色の鳥がいるのは、どうしてか等、自分なりに勉強していきたいと思えます。

探鳥会に行くと開発等で鳥が少なくなったとか、探鳥地が、だめになったとか言う話をよく聞きます。新しい探鳥地も開拓するのは、どうでしょうか。

さて、最近ショックな事件を目撃しました。

6月中旬、生振防風林に鳥を見に行ったのですが、ウグイスが藪の中で「ケキョ！ケキョ！ケキョ！」と、けたたましく鳴いて右に左に何かを追っているのが笹の動き

で分かります。アオジヤシジュウカラが、何かと藪を出たり入ったりしている。あるいはウグイスに応援しているのかもしれない。突然、モズが藪から出て来て枝にとまり、すぐに飛立って行きました。続いてウグイスが声をはり上げながら枝にとまり、鳴き続けています。巣を襲ったモズを追い払った事が、すぐ分かりました。それから10～15分も鳴き続けて、ようやく落ち着いて来ておとなしくなりました。その後1～2回さえずりも聞かれるようになり、ほっとしたその時、モズが枝にとまり、すばやく笹藪の中に入って行き、ウグイスの雛らしい「キョ、キョ、」と声が聞こえ、5～6秒でモズがウグイスの雛らしい物をくわえて飛び出し、枝から枝へと飛び渡って行きました。ドッキリしてすぐ道ぞいに10m位追ったのですが見失ってしまいました。

スマートな体に威厳もあり好きだったモズが、同じカッコウの托卵の被害鳥という立場のウグイスを襲う現実を見せ付けられ自然の厳しさを思い知らされました。

最後に愛護会の益々の発展をお祈り申し上げます。

〒001 札幌市北区北32西3 芳明MS

## 愛護会のあゆみ

(51号～80号)

年 月 日	主 な 出 来 事
58. 4. 26	昭和58年度の総会を北海道婦人文化会館にて開催。会則の一部を改定。
5. 9	昭和58年度の野鳥写真展を三菱信託銀行
～5. 26	で開催
8. 30	第一回の前田一步園賞を本会が受賞、釧路支庁で表彰式が行われる。
10. 23	探鳥会参加者に対し傷害保険に加入することとし、契約を行なう。
59. 1. 21	北海道婦人文化会館で写真家の嶋田忠氏を招き、新年懇談会が開催される。
4. 21	昭和59年度の総会を北海道婦人文化会館で開催。従来の探鳥会の外、新たに東米里、張碓、円山、千歳で一泊の探鳥会を開催すること、会員名簿を作成すること、探鳥幹事にわん章を作り探鳥会で活用すること、他を決定。

▼昭和61年、新年探鳥会（小鳥の村）



年月日	主な出来事
5. 10	昭和59年度の野鳥写真展を三菱信託銀行
～5. 26	で開催。
5. 19	第一回目の千歳一泊探鳥会が開催される。
～5. 20	記録された鳥50種、参加者34名
6. 24	第一回目の東米里探鳥会が開催される。
	記録された鳥25種、参加者33名
9. 1	第一回目の張碓探鳥会が開催される。記
	録された鳥8種、参加者12名
9. 21	会員名簿が完成、野鳥だより57号とともに
	発送される。
12. 21	北海道野鳥愛護会の野鳥絵葉書「北海道
	の珍鳥」が完成、「野鳥だより58号」と
	ともに発送される。
60. 1. 26	北海道婦人文化会館で日本鳥類保護連盟
	の柳沢紀夫氏を招き、新年懇談会が開催さ
	れる。
3. 3	第一回目の円山公園探鳥会が開催される。
	記録された鳥20種、参加者24名。
3. 21	国立国会図書館より本会の「野鳥だより」
	に対し、国際標準逐次刊行物番号の割り当
	て通知があり、「野鳥だより59号」より表紙
	に、ISSNナンバーとして表記し発行する。
4. 20	昭和60年度の総会を北海道婦人文化会館
	にて開催。
5. 12	「全国野鳥保護のつどい」が野幌森林公
	園で開催され、本会も協力団体として参加
	し大きな役割を果たす。
60. 5. 27	昭和60年度の野鳥写真展が三菱信託銀行
～6. 7	で開催される。
61. 1. 18	北海道婦人文化会館で帯広畜産大学の藤
	巻裕蔵助教授を招き、新年懇談会が開催さ
	れる。
4. 19	昭和61年度の総会を札幌市民会館会議室
	で開催される。
4. 25	昭和61年度の野鳥写真展が「ふれあい広
～5. 23	場さっぽろ」、三菱信託銀行で開催される。
6. 28	初めての試み「夜の野幌森林公園を歩き
	ましよう」が開催される。参加者34名。
62. 1. 24	北海道婦人文化会館でウトナイ・ネイチャー
	センターの安西英明氏を招き、新年懇談会
	が開催される。
4. 18	昭和62年度の総会が札幌市民会館で開催
	される。
4. 20	昭和62年度の野鳥写真展が「たくぎん自
～5. 22	動サービスフロア」、三菱信託銀行で開催
	される。

▼野幌森林公園での探鳥会①



▼野幌森林公園探鳥会の1シーン



▼ウトナイ湖探鳥会



▼小樽探鳥会の1コマ

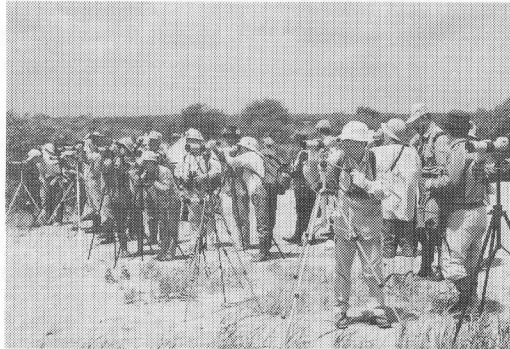


年月日	主な出来事
6. 27	第一回目の「平和の滝、夜の探鳥会」が開催される。記録された鳥20種、参加者25名
63. 1. 23	札幌市婦人文化センターで、本会の村野紀雄氏を講師に、新年懇談会が開催される。
4. 15	北海道自然保護協会の移転に伴い本会事務局が加森ビル6Fに移転する。
4. 16	昭和63年度の総会が札幌市民会館にて開催される。
5. 2	昭和63年度の野鳥写真展がたくぎんサービスフロア、三菱信託銀行で開催される。
6. 21	「私たちの探鳥会—探鳥会17年の記録」が完成、野鳥だより72号とともに発送される。
7. 19	札幌市教育文化会館で「私たちの探鳥会—探鳥会17年の記録」の出版記念式が開催される。
1. 1. 14	本会会員の三木昇氏を講師に札幌市婦人文化センターで新年懇談会が開催される。
4. 15	平成元年度の総会が札幌市民会館で開催される。
4. 27	平成元年度の野鳥写真展がたくぎん本店
6. 2	地下サービスフロア、三菱信託銀行で開催される。
2. 1. 13	札幌市婦人文化センターで、三浦二郎氏を招き、新年懇談会が開催される。
4. 14	平成2年度の総会が札幌市婦人文化センターで開催される。
5. 8	平成2年度の野鳥写真展がたくぎん本店
5. 31	地下キャッシュサービスコーナー、三菱信託銀行で開催される

▼野鳥写真展（平成元年4月27日～）



▼植苗探鳥会のスナップ写真（2.6.10）



※〔写真提供者〕佐々木武・竹内 強・山田良造の各氏から、貴重な写真を借用いたしました。厚く御礼申し上げます。

▼平成2年・新年探鳥会（小鳥の村）



# 北海道野鳥だより

## 総目録

(第50号～79号)

### 表紙

フクロウ  
ミツユビカモメ  
アカショウビン  
アメリカウズラシギ  
ケアシノスリ  
アオサギ  
サカツラガン  
ハシブトガラ  
シメ  
キレンジャク  
キビタキ  
オオヨシキリ  
ゴジュウカラ  
コオリガモ  
フクロウ  
カラフトアオアシシギ  
シロハヤブサ  
ハギマシコ  
ツクシガモ  
ツルシギ  
オンドリ  
ギンザンマシコ  
クロツラヘラサギ  
ヒクイナ  
クロガモ  
コシアカツバメ  
エリマキシギ  
ハイタカ  
オオマシコ  
オオハム

林 大作  
小山 政弘  
紅林 雅文  
柳沢千代子  
富士元寿彦  
速水藤二郎  
松本 光二  
霜村 耕一  
白澤 昌彦  
中尾 弘志  
関口 健一  
富川 徹  
和田 淳  
萩 千賀  
佐藤 康雄  
速水藤二郎  
山田 良三  
若林 信男  
福岡 研也  
畠山佳幸  
佐藤幸典  
柳沢千代子  
笹浪 甲衛  
見延 誠一  
山田 良造  
佐藤 幸典  
竹内 強  
佐々木武巳  
小堀 煌治  
志田 博明

号 利根別自然休養林 長岡 宏幸 54  
測量山 本多 進 55  
ウトナイ湖サンクチュアリ ネイチャーセンター 56  
東米里 霜村 耕一 57  
宮島沼 田辺 至 58  
<sup>ワライ</sup> 鹹 沼 竹内 強 59

### 私の探鳥地

号 円 山 白澤 昌彦 60  
千歳 道川富美子 61  
長流川 福岡 研也 62  
名寄公園 松本 光二 63  
石狩浜、わが家をブラインドにして  
黒田 晶子 64  
豊滝から砥山ダムまで 塚原 英代 65  
美唄泥炭地試験場 田辺 至 66  
神楽岡公園 富川 徹 67  
北大苫小牧演習林 竹内 強 71  
豊平公園緑のセンター 戸津以知子 74  
知内川下流 見延 誠一 76  
千歳市街地 遠藤 茂 77  
茨戸(湖)川周辺 泉 勝統 78  
厚沢部町土橋自然教育林 林 吉彦 79

### 各地の野鳥

号 小樽海岸及びその周辺の野鳥 中野 高明 52  
国後島・野鳥の四季(1)春 藤巻 裕蔵 52  
天売島の鳥 寺沢 孝毅 53  
国後島・野鳥の四季(2)夏 藤巻 裕蔵 53  
岩見沢周辺の野鳥 山田 良造 54  
大樹町の鳥 飯嶋 良朗 55  
国後島・野鳥の四季(3)秋 藤巻 裕蔵 56  
名寄周辺の鳥 松本 光二 57  
国後島・野鳥の四季(4)冬 藤巻 裕蔵 57  
国定公園 大沼・尊業沼の鳥 森口 和明 58  
長沼町の鳥 中尾 弘志 59  
久遠地方の鳥 小山 政弘 61

### 探鳥地案内

西野幌 藤林 忠雄  
植 苗 紅林 雅文  
下 沼 富士元寿彦

札幌市月寒公園の野鳥	三浦 和郎	62	探鳥旅行	羽田 恭子	74
鷗川の野鳥	羽田 恭子	63	沖縄の探鳥旅行	矢野 玲子	75
倶知安町で観られる小鳥たち	石井 正司	65	多摩川河口・東京港野鳥公園探鳥記		
小樽市の鳥“アオバト”について	渡辺 俊夫	66		佐藤 勇	78
ポロト湖の鳥類	佐藤 辰夫	68	サハリンバードウォッチングの旅(1)		
宮島沼の水鳥	草野 貞弘	69		柳沢 信雄	79
帯広畜産大学構内と付属農場の野鳥					
	藤巻 裕蔵	70	<b>鳥 学</b>		
琴似発寒川周辺の野鳥	三浦 和郎	71	標識されたオオハクチョウについて		
日高路・静内の野鳥	谷岡 隆	75		玉田 誠	51
			草原のカワラヒワ	小林 清勇	51
<b>観察記録</b>			トドマツ種子の風散布と鳥散布	斎藤新一郎	51
風蓮町忠烈布湖のダイサギ	松本 光二	51	ホンガラスによるミネカエデの翼果の散布		
ハギマシコ400羽	藤巻 裕蔵	51		斎藤新一郎	54
クマガラ発見	和田 淳	56	マガモの交尾行動	小山 政弘	55
コウライウグイスを発見	太丸 リツ	62	北海道のオンドリの分布	藤巻 裕蔵	58
真冬のアカハラ	竹内 強	63	エゾヤマザクラとカラス	斎藤新一郎	58
珍鳥2種(ツクシガモとヒメウズラシギ)			室蘭の渡り	福岡 研也	59
	井上 公雄	65	給餌台拝見	広 報 部	59
一特集一庭に来る鳥たち	北口盛 他6名	66	鳥学コーナー	〃	60
小樽港にコクガン渡来	富川 徹	67	絵はがきの頒布について	〃	60
珍鳥ニュース(ツバメチドリ他)	井上 公雄	68	フォトライブラリーの設置について	〃	60
〃 (ボナパルトカモメ他)			北海道のメボソムシクイ	藤巻 裕蔵	61
	井上 公雄	69	鳥学コーナー	広 報 部	61
ウトナイ湖探鳥会でのコウノトリ	井上 公雄	70	〃	〃	62
珍鳥ニュース(サンカノゴイ)	掛川 岩太	71	イスカによるカラマツ種子の食痕	斎藤新一郎	64
〃 (ヒメクビワカモメ)	大館 和広	71	北海道のオオジシギの分布	藤巻 裕蔵	64
〃 (コケワタガモ)	井上 公雄	71	鳥学コーナー	広 報 部	64
クロツラヘラサギの記録について	三浦 二郎	72	長生きできる鳥	渡辺紀久雄	68
札幌市内でイソヒヨドリ観察	白澤 昌彦	72	「十勝と釧路の野鳥」の発刊と今後		
チョウゲンボウ営巣記録	山田 良造	73		藤巻 裕蔵	69
天然記念物ークマガラ、コクガン報告			ハシブドガラスのベリットにみられたシウリザクラと		
	隅田重義他	73	ツタウルシの核果	斎藤新一郎	70
キマユツメナガセキレイが石狩に	竹内 強	73	ヤチダモ防風林へ鳥散布された樹種について		
カラフトムシクイのバンディング	三浦 二郎	74		斎藤新一郎	72
冬鳥の話題	井上 公雄	75	給餌台に関するアンケート調査結果について		
北海道に舞い降りた迷鳥たち(1)	山田 良造	76		広 報 部	74
〃 (2)	山田 良造	77	野鳥のくちばし	佐藤 勇	75
ニセコ自然日記より	宗澤美佐子	77	プレゼプロ市街地の給餌台	斎藤新一郎	75
北海道に舞い降りた迷鳥たち(3)	山田 良造	78			
エトピリカ	星子 廉彰	78	<b>随想・主張</b>		
北海道に舞い降りた迷鳥たち(4)	山田 良造	79	感動(ハヤブサ)	新宅正太郎	53
チゴハヤブサの巣立ち	三船 幸子	79	鳥の書票	土屋 文男	56
			保護鳥4題	隅田 重義	57
<b>探鳥旅行記</b>			野幌原始林の思い出	門崎 和子	61
韓国縦・横断白鳥観察ツアー参加記			我がフィールドは今	土田 光子	61
	三浦 二郎	51	野鳥との日々を	小野寺ハル	62

萩 千賀さんを偲ぶ	土屋 文男	63	お知らせ・呼びかけ・報告・その他	号
ガラス越しの鳥の記	大坊 幸七	63		夏鳥の初認日(1963年)
聞きなしの民話(1)カラ類	武沢 和義	63	第1回 前田一步園賞受賞	53
鳥声録音の奨め	小山 政弘	64	「珍しい鳥」の写真で絵葉書を作りましょう	56
聞きなしの民話(2)人里と草原の鳥	武沢 和義	64	探鳥会用の腕章の作製について	56
樽前鳥もよう	三浦 二郎	65	会員名簿の作成について	57
こんな給餌台はいかが	大坊幸七他	66	野鳥絵葉書完成	58
聞きなしの民話(3)ハト類	武沢 和義	67	ISSN のナンバーについて	59
野幌の花から	大坊 幸七	68	「全国野鳥保護のつどい」について	60
愚想庵日誌	大坊 幸七	69	「新版・北海道の野鳥」のごあんない	65
聞きなしの民話(4)ホトトギス	武沢 和義	69	夜の野幌森林公園	66
訪れる野鳥による自然の保存状態判定の試み	田辺 至	72	平和の滝 夜の探鳥会	67
バードテーブルづくり	白澤 昌彦	74	然別湖伐採問題に対し要望書提出	67
聞きなしの民話(5)夜鳴く鳥	武沢 和義	76	誌上写真展	69
追悼 犬飼哲夫先生	野村 梧郎	77	誌上写真展	70
自然保護係は忙しいが…楽しい(1)	隅田 重義	78	事務所の移転について	71
			「私たちの探鳥会—探鳥会17年の記録—」完成	72
			誌上写真展	74
			「野幌」ガイドマップの紹介	76
			誌上写真展	78

## 鳥類関係の図書紹介

### 極東鳥類研究会

極東鳥類研究会は主にソ連極東地方の鳥類に関する紹介を行っており、これまでに次のような文献を刊行しています。希望者には実費で販売いたします。下記の連絡先に直接お申し込みください。

1) 論文集「ソ連極東の稀少鳥類(1984)」

[51ページ] ¥600。

沿ハンカ湖で繁殖する鳥類、サハリンで繁殖する稀少鳥類。東部地域におけるタンチョウの分布と生息数、他に10編。

2) 論文集「極東の鳥類1」(1986)

[49ページ] ¥600。

パラポル谷の鳥相、ハバロフスク市の鳥相、ハンカ湖沿岸水田地帯の鳥類、シベリアと極東山岳亜高山帯の鳥相史、韓国におけるコウノトリの繁殖生態、ビキン川流域におけるシマフクロウの生態、その他。

3) E. ロフコフ著「カムチャツカで繁殖する鳥類…

…1. 2」(1988・1989)

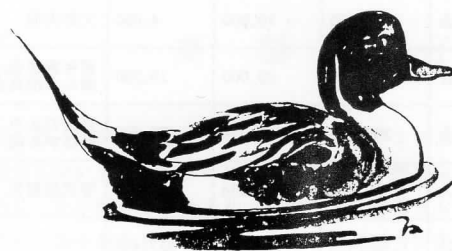
[85ページ・110ページ] ¥800・¥1,000。

カムチャツカにおける鳥類研究史、各論、主なる群集、鳥相形成の歴史など。

〔註〕 申し込み先は……(080)帯広市稲田町

帯広畜産大学 藤巻裕蔵宛

(郵便振替 小樽1-12137 極東鳥類研究会)。



# 平成2年度総会報告

日時：平成2年4月14日(土)午後2時～4時

場所：札幌市婦人文化センター

柳沢会長のあいさつのあと、議長に小堀煌治氏を選出し審議が行われ、原案どおり可決された。

## <議事>

### 1. 平成元年度事業報告

#### (1) 総務

ア 新年懇談会の開催(2.1.13, 札幌市婦人文化センター)

イ 野鳥写真展の開催

・たくぎん自動サービスフロア(元.4.27～5.19)

・三菱信託銀行札幌支店(元.5.22～6.2)

ウ 定例幹事会の開催(毎月1回)

エ 野鳥だよりの発送(76～79号)

オ 傷害保険の更新

#### (2) 広報

野鳥だよりの発行(76～79号)

#### (3) 探鳥

探鳥会の開催(17回、812名)

### 2. 平成元年度会計報告

### 3. 平成元年度会計監査報告

大坊監事から適正に執行されている旨の報告があった。

### 4. 平成2年度事業計画

#### (1) 総務

ア 新年懇談会の開催(1月)

イ 野鳥写真展の開催

・たくぎん自動サービスフロア(2.5.8～5.17)

・三菱信託銀行札幌支店(2.5.18～5.31)

ウ 野鳥だよりの発送(80～83号)

エ ネットタイピンの製作

オ 会員名簿の作成

カ 愛護会の名前入りカレンダーの斡旋

キ 定例幹事会の開催(毎月1回)

ク 傷害保険の更新

#### (2) 広報

野鳥だよりの発行(80～83号)

80号は、20周年記念特集号との合併号とする。

## 平成元年度決算書

### (収入の部)

区分	決算額(A)	予算額(B)	増減(A-B)	摘要
繰越金	170,016	170,016	0	
個人会費	672,000	540,000	132,000	357人 (平成元年度分及び過年度分)
団体費	9,000	18,000	△ 9,000	1団体 ( " )
会費仮受分	105,000	0	105,000	平成2年度以降の前受分
寄付金	14,050	10,000	4,050	大野氏他
参加費	47,250	35,000	12,250	新年懇談会, 藤の沢探鳥会
売上金	398,600	320,000	76,600	野鳥だよりの 絵はがき他
雑収入	19,536	6,984	12,552	写真展謝礼 他
合計	1,433,452	1,100,000	333,452	

### (支出の部)

区分	決算額(A)	予算額(B)	増減(A-B)	摘要
印刷費	431,055	470,000	△ 38,945	野鳥だよりの, チェックリスト
通信費	188,431	240,000	△ 51,569	だより発送費他
会議費	110,554	120,000	△ 9,446	幹事会, 総会等
消耗品費	5,440	23,000	△ 17,560	コピー, 事務用品
賃金	6,000	15,000	△ 9,000	だより発送, 運搬
報償費	156,766	160,000	△ 3,234	探鳥会手当, 事務所謝礼
雑費	69,900	72,000	△ 2,100	障害保険, 写真展
合計	968,146	1,100,000	△ 131,854	

### (収支の部)

(収入) (支出) (残高)  
1,433,452 - 968,146 = 465,306

内訳 会費仮受分 105,000  
繰越金 360,306



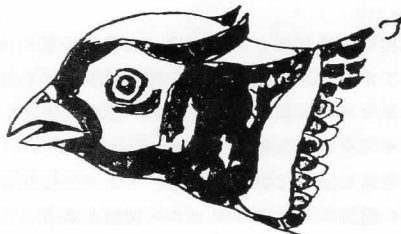
- (3) 探鳥  
探鳥会の開催(17回)
5. 平成2年度予算
6. その他
- (1) 総会への出席者が多くなるよう、講演・ビデオ等の催しを同時に行うことなどを考えていく。
- (2) 写真展は、休日にも見られるような場所を捜したい。
- (3) 会報のページ数は、原稿がある時は予算の範囲内でふやすこととする。

7. 役員選出

新たに千葉広氏、永島良郎氏が選出された。  
なお、総会後の幹事会において、代表幹事と各幹事の担当を定めた。

会 長 柳沢信雄  
副 会 長 小堀煌治  
監 事 野村梧郎、大坊幸七  
代表幹事 白澤昌彦

会計幹事 道川富美子  
総務幹事 ○渡辺紀久雄、柳沢千代子、大町欽子、清水朋子、野村紀雄、井上公雄、泉 勝統  
探鳥幹事 ○井上公雄、大野信明、戸津高保、富川徹、山田良造、中野高明、渡辺俊夫、千葉 広、永島良郎  
広報幹事 ○泉 勝統、霜村耕一、小堀煌治、竹内 強、武沢和義、鎌田玲子、白澤昌彦  
(○印は各担当代表者)



## 平成2年度予算書

(収入の部)

項 目	前年度 予算額	予算額	摘 要
繰越金	170,016	360,306	
個人会費	540,000	540,000	1,500×360人
団体会費	18,000	13,500	4,500×3団体
寄付金	10,000	10,000	
参加費	35,000	35,000	新年懇談会
売上金	320,000	380,000	野鳥だより、 絵はがき他
雑収入	6,984	10,194	利息他
合 計	1,100,000	1,349,000	

(支出の部)

項 目	前年度 予算額	予算額	摘 要
印刷費	470,000	530,000	野鳥だより(4回)、 会員名簿
通信費	240,000	240,000	だより発送費 他
会議費	120,000	120,000	総会・幹事会 他
消耗品費	23,000	20,000	コピー、事務用品
賃 金	15,000	12,000	野鳥だより発送、運搬
報償費	160,000	175,000	探鳥会手当、 事務所謝礼 他
雑 費	72,000	72,000	障害保険、写真展 他
その他	-	180,000	ネクタイピン製作
合 計	1,100,000	1,349,000	

※ 会員数

項 目	63.4.1	元.4.1	2.4.1
個人会員数	413名	433名	432名
団体会員数	4団体	4団体	3団体

## 北海道に舞い降りた迷鳥たち (5)

山田良造

去る3月24日、北海道野鳥愛護会会長柳沢信雄氏から、「穂別のアオサギコロニー営巣木が切られているとの情報があり、心配だから見に行こう。」と知らせを受け一緒に向った。

穂別町仁和のアオサギコロニーは、30アール程のカラマツ林で、アオサギが80個程の巣を作り営巣していた。隣接地のカラマツ林が農地拡張のため一部切られていたが、アオサギコロニーは無事でした。

土地の所有者に会って話を聞くと、アオサギは10年前から営巣し、穂別町ではこのコロニー営巣木を買い上げ  
**16・ノドアカツグミ (ヒタキ科)**

1980年4月12日朝、江別市野幌末広町11-3北海道野鳥愛護会会員井上元則氏は、自宅庭バードテーブルに、ツグミに似た見なれない鳥が飛来し観察した。

この鳥は4日間続けて飛来し、4月15日はリンゴをついばんだり、桜の枝に止って1時間程いたのでじっくり観察し、ソ連の文献等調べて迷鳥ノドアカツグミとわかったもの。ノドアカツグミは全長約23.5cm。♂は眉斑およびのどから胸が赤褐色。♀はのどから胸は白色に赤褐色の縦斑がある。

中央シベリア地方で繁殖し、冬はインド、パキスタン地方に南下する。日本は渡りのコースから外れているため、迷鳥として記録があ

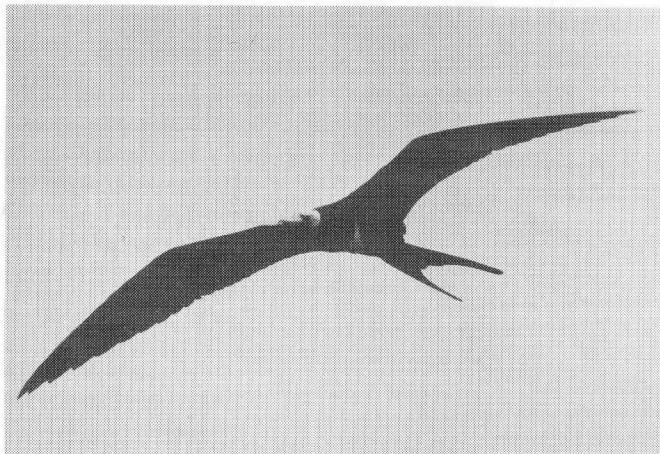
て保護していること、また地域の中学校はアオサギのコロニーを、教育の一環として毎年観察しており、野鳥保護に関心の高い町とわかった。

今回の迷鳥記録は、江別市井上元則氏(故人)、梅木賢俊氏、札幌市小堀煌治氏、それに私の記録を紹介します。(鳥名番号は前号から続く)

なお前回(4)のゾウゲカモメ記事中大塚美智子氏となっているところは、大館・美智子氏の誤りでお詫びして訂正いたします。



ノドアカツグミ 1980・4・15、江別 井上宅 故井上元則



コガンカンドリ 1985・8・1、羽幌港 小堀煌治

るのは、1980年3月25日、石川県船倉島でノドアカツグミと思われるのが観察されている。

この種には体色の異なった2亜種、ノドグロツグミとノドアカツグミが知られている。

### 17・コガンカンドリ (ガンカンドリ科)

1985年8月1日午前11時頃、札幌市南区藤野3条7丁目278-18北海道野鳥愛護会会員小堀煌治氏は、天売島に渡るため羽幌港で連絡船を待っていた。このとき、乗船を待っている人や、港で釣りをしている人の頭上を、カモメよりはるかに大きくて長い翼をした鳥が、滑るように飛んできた。カツオドリやガンカンドリにも似ていたので、とっさに写真撮影をし観察すると、この鳥は漫然と飛びまわっているのではなく、ウミネコが喰わえてい

る餌を横取りしようと追いかけているのでした。

翌日天売島から羽幌港に戻ったときは、この鳥の姿はなかった。後日撮影した写真を見てコグンカンドリとわかったもの。

その数週間後の8月25日、根室市春国岱で行なわれた日本野鳥の会根室支部の探鳥会で、当時根室市居住の梅木賢俊氏等がコグンカンドリを観察している。

コグンカンドリは全長約75cm。♂は全体黒色で、の

どは赤色、腹の両側に白斑がある。♀はのど、胸、腹下面が白く、顔の上半分から背中にかけて黒色。若鳥では頭部全体、胸、腹が白く、胸に黒帯がない。

インド洋、太平洋の亜熱帯および熱帯地域に広く分布し、大西洋でも局地的に繁殖地がある。この鳥は迷鳥ではなく、日本には太平洋岸の地方にときどき飛来するが、北海道に飛来した記録は少ない。

ソデグロツル 1977・11・3、木古内建川 山田良造

#### 18・ソデグロツル (ツル科)

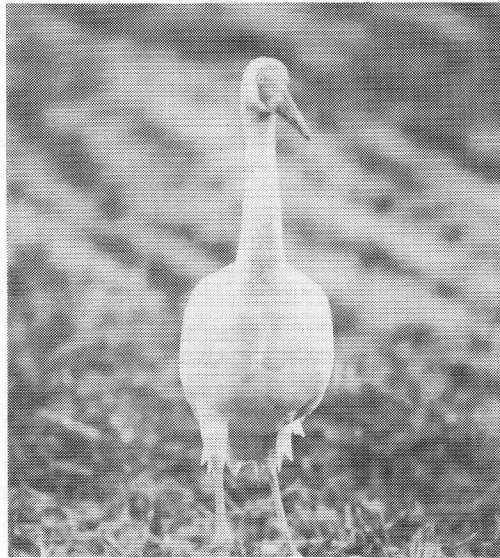
1977年10月11日頃、上磯郡木古内町大平農業渋谷幸男方裏水田に、見なれないツルが1羽飛来し、函館市森口和明氏(故人)が、ソデグロツルであることを確認した。

当時私は旭川でこのことを新聞報道で知り、11月2日鳥仲間の内海千樞氏と一緒に木古内に向った。あいにくその日は雨だったが、ソデグロツルは木古内町建川の水田にいた。50m~100m先で餌を捜しており、ときどき水田脇の水路に降りてドジョウを捕えていた。

2日間の観察だったが、人に対する警戒心はそれ程で無く、帰る日にはアキアカネを追いかけて、私たちの間近まで寄ってきた。それがこの写真です。

ソデグロツルは全長約135cm。くちばしの長い大形のツルで、顔の全面が赤色、体は白色、くちばしと足が暗赤色。

シベリアのオビ川中流域、ヤクーツク付近、コリマ川デルタ地域の西側で点々と繁殖し、冬はイラン、インド北部、中国揚子江流域等に渡る。日本にはまれな冬鳥として渡来し、1959年~1961年(3回)鹿児島県出水市ツル渡来地、1961年石川県羽咋市、1969年沖縄県与那城、



1980年鳥根県で記録され、北海道では前記記録と1985年5月24日タンチョウ特別調査のとき、別海町野付半島で観察されている。

#### 19・ケワタガモ (ガンカモ科)

江別市大麻宮町3-3北海道野鳥愛護会会員梅木賢俊氏は、当時網走市に住んでいた1987年12月27日午後2時頃、流水到来間近な網走市能取岬に出かけ、野鳥観察をしていた。この日は曇りで風もなく、沖合い300m~400m先に浮かぶシノリガモを見ていると、20羽位群れの中に、大形で別種のカモ類1羽が入っているのに気がついた。しかし20倍のスコopでは判別できず、40倍を入れて判別すると、ケワタガモ♂若鳥であることがわかった。ケワタガモは翌年の2月6日まで能取岬で観察された。

ケワタガモは全長約56cm。日本で記録された3例はいずれも♂若鳥で、♂の若鳥は頭部と体は灰黒色で胸は白く、くちばしは橙色で、基部にはこぶ状のふくらみがある。



ケワタガモ 1988・1・24、網走能取岬 大館和広

おもにシベリアの極北部および北アメリカ大陸の極北部で繁殖し、冬はやや南下し、スカンジナビア半島、カムチャツカ半島、アリューシャン列島、カナダ東部、グリーンランド南部で越冬する。

日本にはまれな冬鳥として北海道の海上に渡来し、1970年3月根室市花咲、1981年3月網走港、1987年前記記録

の3例がある。

参考文献

日本産鳥類図鑑(東海大学出版会)、鳥630図鑑(日本鳥類保護連盟)、フィールドガイド日本の野鳥(日本野鳥の会)、北海タイムス1980年7月22日報道記事等参照

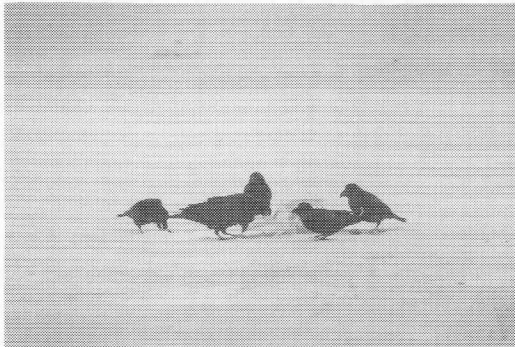
〒003 札幌市白石区栄通16丁目4-13

## 自然保護係は忙がしいが……楽しい (2)

隅田重義

(1) オオハクチョウの哀れな死骸を見て。

国定公園大沼は……周囲40キロで小沼は……16キロ、大沼は24キロ。春夏秋冬を通して観光客は絶えない。1200余の鳥々。紆余曲折。実にすばらしい。中でも冬のハクチョウを見る人が多い。小沼の一部分の凍らないところに何百羽と声をあげての交歓風景は特にすばらしい。その美しい風景の中にカラスにつつかれているハクチョウの死骸を見た。恐らく夜、氷の上で寝ているのをキツネが襲ったのであろう。北帰行の時に1羽でも足りないと、全部揃うまで空を廻り続ける愛情を……私は書物や体験で身にしみているので、このハクチョウの残骸を見て去りかねた。2月17日のことである。



(2) キタキツネが……温泉の湯治に。

これは函館市営の谷地頭温泉に傷の治療に来たのだろうか、後足びっこである。しばらく眺めいった。この堀の中の人では入れぬところから入りこんだのだろう。

函館山観光地から、どうして怪我をしたのか、しばらく様子を観察してみた。

古老の話では、よく温泉の発見には、キツネが湯治していたので発見したということが多く、私も湯治のようすを見たことがある。

このキツネは、人に慣れていて逃げようとしなかった。恐らく餌を拾っている時、車にひかれたのであろう。観

光客はよく餌を投げあたえる。私も巡見の度、これまでに何度か見ている。狭い函館山……殖えた子狐の餌には、特に冬は困ることであろう。

……見る。ふやす。生きる。……ことはどこの世界にもこうしたことを見せつけられる。こんなことに、私たち鳥獣保護員は、いつも考えさせられる。

……ここしばらくは、湯治させてやりたいなあ……とキツネと別れた。



(3) 渡り鳥健在なりと……喜ぶ。

この写真は昨年4月に。北へ帰るカモ類の何万羽という大群が小沼に羽を休めていた。5日間位で去った。15種が観察され、見飽きしないし、とても勉強になる。

鳥が減ったのではなく……羽を休めるところが減ったのである。環境学を大いに実践の上で体験したいと思う。



(4) テンが最近ふえてきたという知らせに……さてと思って雪の深い山峡へと出かけた。渡島支庁・鳥獣保護員・案内の方……。とにかく大変な雪であった。

大きさ・方向・餌・環境などをゆっくりと記録した。テンの足あとに、もうひとつ人の足跡（1人だ）……人がテンを追っているのだ。人とテンの両方を調べる。トラバサミを架けに来たのである。実に丁寧に仕掛けてあったが、とうとう発見した。仕掛けた儘、忘れて帰ったのであろう。この遠い山峡にまで仕掛けに来るとは……と感心もしたが、殖えたふえたという噂も真実であったのだ。見たところ十数箇所仕掛けていたようだった。その上、トラバサミも規定外のものであった。

(5) この標識は「発砲注意」……電線を張るための作業注意である。ブルも見逃している。この写真は高いところで、下のほうは畑地でコウライキジが豆畑を荒らしていた。どんな状況かと……被害調査に行ってみた。

この電柱を含め5～6枚の標識がつけられ、これには3箇所も穴があいているのを発見した。発砲すると、これらに丁度あたらしい。誰の目にも「発砲注意」と読める。

毎日のように人が来て撃つとの知らせであった。コウライキジは「当分禁猟」となっている。電線も傷んで、切れてぶらさがっているところもある。私たちはハンター



には会えなかった。これまでにコウライキジ解禁中に巡視中……駅長さんから、「ご注意願いませんか」……と注意を受けたことがあった。その後、電話不通となった時に当局が調査すると……被害場所もわかり、電話線も回収して来て、私たちも見せられたことがあった。「誰が不法発射したのか」調査のしようもなかった。ハンターの中には、「こんなところに電線を張った方が悪いのだ……」と。笑うに笑えないこともあった。

(6) これは、今年に新しく決った「鳥獣保護区」大野町八郎沼公園に建てたものである。前は沼で……町役場・支庁の係員、自然保護員の手で建てたのであるが、良く見える場所を選定しなければならず時間を要する。公園に来る人々の事を考え、何回も相談し時間をかけて建てたものである。こうして建てた「標識」に、かつてはハンターの撃った弾跡があったりしてガッカリした。

自然愛護・鳥獣保護の心が育っていないのに、いくら標識を建てても……とさえ思ったりした。これは標識を建て乍ら、つくづく考えたことであった。



最後に「捕獲し釣り針抜く」という越田自然保護員の苦心談が、NHKや道新で報道され、世間の話題となったことである。今でも、海岸に行くと、釣り針でサメの腹わた等を針につけて海に投げ、カモメを釣っている人を見かける。注意をすると「ゴメ」は捕って食べてもよいが、「カモメの白い」のはダメだと聞いているという。カモメに種類はあるが、一見してカモメ類とわかっている。特にゴメというのはいない。皆カモメなのである。

それなのに、ハンターが「ゴメは捕獲してよいが、カモメは駄目だ」と吹聴している人もいるときいたが、鳥獣の判別・識別もできないハンターがいるとは、まさしくたいへんなことである。





〔鶴川〕

平成2年8月26日(日)

平成2年9月9日(日)

鶴川河口付近牧草地で、潮風に吹かれながら、秋の渡りのシギ類を見る探鳥会です。少なくとも...

午前9時30分 JR鶴川駅前集合です。

〔野幌森林公園〕

平成2年10月21日(日)

赤や黄色に色彩られた紅葉が美しい野幌の森で、渡り途中のカシラ、ダカ等が見られる探鳥会です。

昨年は樹間上空を飛ぶノスリ、渡り途中のメジロの群、沼でのんびり泳ぐカルガモ、スズカモ等を観察しました。

午前9時0分大沢口駐車場入口集合です。

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

平成2年9月16日

平成2年10月7日

午前9時0分大沢口駐車場入口集合です。

※なお、いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り実施いたします。昼食・筆記用具・雨具等をご用意ください。探鳥会の問い合わせは 551-6321井上宅まで。



◆野鳥写真展の開催

例年、力作揃いの野鳥写真展を、今年もたつき本店キャッシュサービスコーナー(5月8日~17日)と三菱信託銀行札幌支店ロビー(5月18日~31日)

で開催致しました。立派な作品を応募された方々に感謝申し上げます。また多忙の中を会員の皆さんに観賞いただき、さらに有意義なご意見などを沢山頂戴いたしました。厚く御礼申し上げます。

〔写真提供者氏名一覧表〕 難波茂雄(パン・ハシビロガモ) 山本一(ハシトガラ) 佐藤勇(ヒシクイ・ハクチョウ) 山田良造(ホウロクシギ・コマドリ) 石橋孝雄(オオワシ・ハイタカ) 鈴木克司(ミソサザイ・メジロ) 田中康夫(ミユビゲラ) 遠藤茂(キビタキ・

3羽のエゾフクロウ) 遠藤幸子(タゲリ) 佐藤幸典(オオワシ・キマユツメナガセキレイ) 渡辺喜久雄(カッコウ) 和久雅男(オオヒシクイ・タンチョウ) 千葉広(カワセミ) 富川徹(アオジ・オオアカゲラ) 佐藤康雄(チョウゲンボウ・ハイタカ) 柳沢信雄(フクロウ・キジバト) 佐々木武己(アカゲラ)

以上18名 30点

◆原稿の投稿お願い致します。

本誌に原稿をお寄せください。野鳥の観察記録や研究報告・随想そのほかなんでも結構です。札幌在住の会員の方からは投稿は割合多いのですが、是非地方の会員の方の原稿がほしいのです。よろしくお願い致します。

字数は400字詰原稿用紙5枚以内、写真・別表などはその限りではありません。

〔編集後記〕

昨年の10月頃から幹事会で...創立20周年記念計画の骨子について、何回も話し合われました。

本誌も「20周年記念誌」を合併80号として企画することになるだろうということになりました。

4月の総会で新役員が決まり、予算も承認決定ということで、ようやく20周年記念誌の編集作業が始動したのです。早速5月18日に編集会議で具体案を提案検討。そして、広報幹事全員の業務分担を決め仕事にかかったのです。

6月20日を一応原稿締切予定日とする。原稿が予定通り集まるかどうか心配しましたが、その危惧は無用でありました。

予定頁数を2枚もオーバーし、しかも探鳥会報告は81号廻しにするなど...でようやく結着。

7月10日には初校正、割り付け作業も終り、印刷所送りとし...ホーツと一息ついたところです。

創立20周年。...その年輪の重さをしみじみと実感させられた編集作業でありました。(編集幹事...泉・鎌田)

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円 (会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1-18287 060 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465